

【金賞】

東日本大震災と「文学」の役割

藤田 直哉

博士課程在学中(リース・モートン研究室)

キーワード: 文化、政治、文理融合

概要: 東日本大震災に対して文学が担うべき役割は、安易な「物語」を拒むことである。人間的感情のフィルターの「物語」の向こうにある人間的な事実を見ないことには、あらゆる理論や提言は土台から崩れるだろう。

東日本大震災後、おそらくあらゆるジャンルに、「役に立て」という呼び声が、実際の声としてか、あるいは良心への声としてか、なされたであろう。同時に、「何か役割を果たさなければいけない」という内発的な衝動に駆られた人間も多いだろう。

ここでは愚直に、「文学」という立場から、その「呼び声」に対して答える。

東日本大震災が起った後、僕はすぐにSF評論家として駆け回り、様々なSF作家や評論家の声を集めた『3・11の未来 日本・SF・創造力』(作品社)の編集を行い、八月に刊行した。故小松左京の絶筆を収めた本書は朝日新聞の「天声人語」などでも取り上げられた。

本書の中で筆者が主張したのは、安易な「物語」の勃興に対して警戒の言葉を説くことだった。

災害が起きれば災害を題材にした小説が増える。トラウマを負った主人公の物語や、原子力を巡る物語も描かれるだろう。さらに、大量の死や、理不尽な死に対する意味づけの「物語」も多く語られるだろう。例えば「日本社会への天罰だ」というような、安易極まりなく、単純であるが、それであるがゆえに力を持つ、物語が。

しかし、「文学」の変質を真に観察しなければならないのは、そういう表層的な変化ではなく(その変化の観察と解釈もまた重要であるにせよ)、もっと深くにある、まだ言葉になっていないような変化である。震災後、多くの作家やアーティストたちの作品を見たが、安易な反映を急ぐ作家と、そうではなく性急に反映させることを避けて時間をかけて自然に作品の変化を求めるタイプの二種類の作家がいた。

一般的に、「物語」と「文学」は違うものである、と文芸評論の世界では言っている。その場合の「文学」とは、「反物語」であるという側面も大きいが、そのように単純にカウンターを行うということだけではなく、それとは別種の、分かりにくく価値やものの考え方を提示するものである。

我々は、世界を解釈するときに、「物語」に簡単に絡めとられる。マスメディアの提供する分かりやすい図式や、元々脳の中にある考え方の図式に当て嵌めて解釈してしまう。例えば、「被災者はかわいそうだ」と

いう、ほとんど反論不可能な図式である。しかし、そこでは、反物語も物語になってしまうことがある。前述の「天罰」発言を行ったのは石原慎太郎だが、それに怒り、「東北は貧困で悪くない」「東京が篡奪している」という怒りに満ちて津波の被災地に行った親しい人がいるのだが、彼女は現地の人も、東京の「心無い」発言に怒っていると思い込んでいた。しかし、現地で見たのは、石原軍団の焼き出しに大喜びする人々であり、表出される怒りは、被害が少ない地域から焼き出しを食べに来る人々へのものだった。

彼女は、東京にいて、怒りに駆られるあまり精神的に追い詰められるほどであったが、現地に行って、思いつめた感情が消え、途方にくれた感じで、様々なことを語った。現地の人に何を一番後悔しているかと訊くと、家族を失った人が「米軍が来たときにそれを撮影するカメラの電池が切れていたこと」だと答え、避難所の人々が東京を恨んでいるかと思うと、「東京」から来たというだけで彼女をちやほやして「芸能人見たことあるのか」ばかり訊いてきたり、女子高生がニコニコ動画で「踊ってみた」を一五〇再生されたと言って自慢してきて「東京に出てアイドルになる」と言われたり、自分は地方の公立大学を出ているからお前より上だと見下してきたり……

現地でも、彼女と同じような、「言説」や「政治」や「格差」の問題を述べる人はいたが、それはほとんど大学を出ている人間であった。つまり、それはいわゆる彼女が属しているとも思っていない「知識人」の「決まり文句」、すなわち「物語」でしかなかったのだ。それを裏切る民衆、もしくは大衆、という問題は、プロレタリア文学の頃からの古典的な問題であるが、そこにある「人々」の実際に生きている姿を見て、途方に暮れると同時に、ある種生真面目に思いつめたものが落ちるという効果があった。

この話をすると、大概の人は笑う。深刻な話なのに、笑う。東日本大震災後の文学について、深刻に話していく、死を巡る陰鬱な雰囲気になったときにこの話を僕がすると、井口時男先生は、「それは文学だから書け」と仰った。

人は何故、事実に笑うのか？ それは不謹慎かもしれない、非倫理的かもしれないし、差別的かもしれない。しかし、勝手な図式で作り出した通念や「物語」のフィルターを通して見られている「事実」は「事実」ではないかもしれない、もしそうであれば、それをベースにしたあらゆる思考体系は土台から崩れるか、乖離したものとなり、やがて軋みから自己崩壊するだろう。

人間的感情が直面することを拒んでしまう「人間の事実」に直面するための思考方法を提供すること——それが「文学」が未だに担っている、他には代替されることのない役割である。